

農林水産省食料産業局長賞

『新たな挑戦へのエネルギー』

静岡県浜松市立伊佐見小学校 六年二組 女子 大杉 明日香

「柿食へば 鐘が鳴るなり 法隆寺」残暑きびしい夏の日、図書館で借りた正岡子規の俳句集を読んでいて、私も一句思いついた。

「柿狩って 山羊にえさやる 幼稚園」

私がつ通っていた幼稚園は、自然とのふれ合いを大切にしてくれた。春には竹の子掘り、夏にはじゃがいも掘りに魚つり、秋には柿狩りや栗狩り、さつまいも掘り、冬には焼いもパーティー。昼食タイムには、収穫した野菜を園長先生と役員のお母さん達がおいしく調理してくれた。竹の子ごはん、魚の天ぷら、栗ごはん、カレー、どれも絶品で、自分達の手で採った野菜や魚の味は格別だった。

思い返してみると、遊びの中で旬を知り、食物への感謝の気持ちが育まれていた。先の一句は、柿の木がある斜面の横で、山羊が放し飼いされていた光景と、あざやかな黄赤色の実を思い出し、少し早い秋を詠んだ。

私は小学校一年生のときからほぼ毎日、田畑の横をジョギングしている。顔見知りの農家のおばあちゃんとおしゃべり仲間。夏は、互いに服の色が変わるほど大量の汗をかく。今年は猛暑で、あせもができて大変だったと言っていた。それでも土をいじることが好きというおばあちゃんの笑顔は、とても素敵だ。また、五年生のときには、学校で米作りの経験をした。その中で、農家の大変さを知り、おばあちゃんの額と背中の中を思った。

こうした恵まれた環境の中で育ち、私は学校で給食をおいしくいただいている。栄養士の先生が考えてくださったメニューは、工夫が満さい。地元、浜松の特産品をたっぷり盛り込んで、いりどりもあざやかだ。四時間目、給食室からだだよってくるおいしそうな香り。今日のメニューは何かかと、授業中でも一瞬鼻と頭が集中力を失ってしまう。

給食タイム、この言葉を聞いてワクワクするのはなぜだろう。幼稚園のときも、調理場からの香りが、夢中でどろだんごを作っていた私の手を止めた。あのときの記憶から、その答えが少し見えてきた。

給食は、みんなと分け合って食べるからおいしいのだ。私が苦手な食物でも、友達が笑顔でおいしそうに食べていると「私も挑戦してみよう。あれ、意外においしい」そうした経験は一度や二度ではない。そこで、食わず嫌いを克服し、好物になったものもある。

そして、友達のおしゃべり。四年生の冬、持久走大会で思うような結果を出せず、私が落ち込んでいたとき、友達が、

「給食を食べて、元気を出そう。あつちゃんの努力は、私がちゃんと分かっているよ。」友達の心の温かさ、おいしい温かい給食が、私の新たな挑戦へのエンジンをかけてくれた。

時を超えて思い出す香り、味、おしゃべり。友達と「同じかま」の飯を食べ、心と体が成長する。それが、私にとっての給食だ。